

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 4 月 2 日現在

機関番号：33917

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K16685

研究課題名(和文) 考古学理論・実践の歴史・哲学的考察に基づく人文学の哲学の基盤構築

研究課題名(英文) Philosophy and history of archaeological theory and practice

研究代表者

中尾 央 (Nakao, Hisashi)

南山大学・人文学部・准教授

研究者番号：20720824

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は考古学を中心として、その歴史、理論的基盤を哲学的に検討することを目指した。特に注目したのが、考古学における人文、社会、自然科学的側面が相互に関連し合うという特徴であり、同じ分野の中でそれらの異なる側面がどのように関係し、またどのような関係にあるべきかを考察した。主な成果としては、まず日本考古学の歴史的側面(プロセス考古学やポストプロセス考古学といった海外での理論的動向に対して日本考古学がどう対応したか)を考察し、論文と書籍にまとめた。理論的基盤に関する哲学的考察も同時に行い、論文を投稿することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は考古学理論・実践の歴史・哲学的考察を第一の目標にしていたが、生物学や物理学など、さまざまな科学技術に対する哲学的・歴史的分析が行われている中で、世界的に見ても、考古学に関するこうした分析は決して多いとは言えない状態である。また、考古学という営み自体、世界各国で多様性が見られる。本研究では主な対象として日本考古学(特に日本考古学と世界考古学の関係)を取り上げたが、こうした意味でも本研究の成果は一定の意義をもつと考えられる。

研究成果の概要(英文)：The present study focused especially on archaeology and examined its historical and theoretical foundations philosophically. One of the main interests was how aspects of humanities, social sciences, and natural sciences actually do and should interact in archaeology as a single discipline. Some representative works include a paper and book chapter examining the history of Japanese archaeology focusing on introductions of processual and post-processual archaeology to Japan, and a paper (submitted) investigating theoretical foundations of Japanese archaeology philosophically.

研究分野：自然哲学

キーワード：考古学の哲学 考古学の歴史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年、生物学や物理学などを中心として、さまざまな分野を対象に科学哲学・科学史的考察が行われている。しかし、こうした研究の中でも、やはり社会科学や人文学を対象とした歴史的・哲学的研究はそれほど多いとは言えない状態が続いている。

また近年では(学術的のみならず、社会的にも)、人文学・社会科学の位置付けが問われる場面も少なくなく、そうした意味においても、人文学や社会科学の歴史的・哲学的分析が重要になると考えられる。こうした問題意識のもと、本研究では考古学を対象として取り上げ、歴史的・哲学的考察を行い、さらにはその考察を足がかりとして、人文学の哲学の基盤を構築しようと試みた。

考古学は日本では人文学に分類される。しかし、アメリカなどの国では、人類学の一部として社会科学に分類されることもある。また、こうした分類が示す通り、考古学には人文学や社会科学、さらには自然科学的要素も近年では積極的に導入されており、現代の考古学はある種の学際的融合分野として成立していると言ってよいだろう。そうした意味で、さまざまな分野と比較しつつ、人文学の位置付けを考察するには、考古学(およびその近隣分野)は非常に最適な対象であると言えるだろう。

2. 研究の目的

本研究の目的は、考古学を一つの事例とした、人文学の哲学の基盤構築である。人文学も他の分野と同様、歴史とともに多様化・学際化しており、さまざまな変化を遂げている。こうした歴史的变化を踏まえ、考古学、特に日本考古学の理論と実践を哲学的に考察し、考古学内部の多様性を明らかにするとともに、そのあるべき姿についても考察を展開する。それを踏まえて、人文学の位置付けを検討する。

3. 研究の方法

基本的には文献調査を主とした。しかし、考古学の実践を十分に捉えるには、遺物の観察や遺跡の発掘といった、考古学独自の営みにも関与しつつ、考察を進める必要がある。したがって、遺跡の発掘にも時折参加し(2017年および2018年には岡山大学考古学研究室の鳥取県岩伏し遺跡の発掘に同行し、調査を行なった)、考古学の研究方法などについて認識論的見地から検討を行なった。

また、さまざまな考古遺物の観察・情報収集なども同時に行いつつ、考古学理論・実践の歴史的・哲学的考察を進めた。特に、共同研究者と進めていた縄文時代・弥生時代における集団的暴力の起源・原因に関する考察を同時並行して行い、古人骨データや甕棺と呼ばれる弥生時代の土器製の墓などについて、情報収集や観察を行なった。

4. 研究成果

まず、日本考古学の実践と理論については歴史的・哲学的考察をある程度まとまて行うことができ、それらは論文や書籍として発表することができた(中尾 2018, 2019, 投稿中, Nakao 2018, 中尾・松木 2017, 中尾・松木・三中 2017)。日本考古学における自然科学的手法の導入について歴史的に考察した論考については、これまであまり扱われてこなかったテーマであるため、一定の意義を持つだろうと考えている(中尾 2018, Nakao 2018)。もちろん関連する先行研究はいくつか挙げられるが(e.g., Igawa-Smith 1982)、これらの先行研究においては特定の大学や研究者の影響が強調されることが多く、日本考古学における自然科学的手法の導入の全体像を捉えきれているとは言い難い状態であった。Nakao (2018)においては、戦後~1980年代までに日本考古学の代表的雑誌(『考古学研究』や『日本考古学』など)に発表された原著論文を全て調査し、その中でどういった研究者がどのような自然科学的手法を用いて考察を行なっているかを検討した。結果、先行研究では見逃されていた研究伝統が非常に大きな役割を果たしていることが明らかになった。またこの内容については中尾(2017)のような口頭発表も行なうことができた。

さらに、歴史的考察に関しては、日本におけるプロセス考古学とポストプロセス考古学の代表的牽引者である二人の研究者を招いて、両アプローチの導入に関する歴史的、あるいは理論的側面を議論し合うシンポジウムを2016年に開催し、それを踏まえた論文集を2018年に発表することができた(阿子島・溝口 2018)。こちらでも日本でプロセス考古学やポストプロセス考古学がどのように受け止められていたかについて歴史的に考察した(中尾 2018)。

日本考古学の理論的基礎を考察した論考についても、これまであまり体系的に論じられることのなかったテーマを扱っているため、その意味において、こちらも一定の意義をもつものになったと期待したい(中尾 2019, 投稿中)。こちらの論考では日本考古学での現時点での実践と理論的基盤の関係について考察し、両者の間にあるさまざまな問題点を指摘した。特に指摘したのは実測図や型式についてである。今も遺跡の発掘報告書には実測図という2次元での遺物データが記載されるが、この実測図を巡っては実践的にも理論的にも一致した見解が存在しない(遺物のある程度「客観的に」記載したものである、という程度の一致はあるが)。その上、実測図に基づいて研究を行うことは考古学の中では評価されづらい状態が続いている。そういった状態の中で、実測図を記載した遺跡発掘報告書を発行し続ける意義はどこにあるのか、そういった点が不明瞭なまま、放置されていることを指摘した。また、型式についても同様であり、実践と

理論の間に同様な乖離が見られる状態を長年放置してしまっており、日本考古学の理論的基礎には大きな課題が残されたままであると論じた。こちらの内容については、日本旧石器学会第17回大会で開催されたシンポジウムでも発表を行なった。

また、2014年より継続していた別の研究費と合同で、文化進化の観点から考古学および考古遺物を考えるという『文化進化の考古学』も出版することができた(中尾・松木・三中 2017)。本書では主に日本の考古遺物を用いた文化進化研究が紹介されているが、導入部分において、日本考古学と数理的アプローチの関係について、歴史的・哲学的に(簡単ではあるが)考察を行うことができた(中尾・松木 2017)。

次に、同時並行して行なった共同研究についても成果を述べておく。第一に狩猟採集時代である縄文時代の古人骨データに着目し、縄文時代における集団的暴力について考察した論文を発表した(Nakao et al. 2016)。近年、狩猟採集民(時代)は比較的平和である、という人類学・考古学での定説に対して、狩猟採集時代からヒトはかなりの頻度で集団的暴力に関わっていた、という研究が発表されるようになってきている。本研究はこうした近年の研究に対する反例となり(実際、縄文時代に見られる集団的暴力の痕跡はほぼ皆無である)、こちらは世界的にかなりの注目を浴び、NatureやWashington Postなどのメディアでも紹介された。

さらに、弥生時代とヨーロッパ中石器時代についても、同様の考察を行なった。弥生時代およびヨーロッパ中石器時代の古人骨データに着目し、縄文時代と比較することで、どの時代により多くの頻度で集団的暴力が発生しているかを考察することができた(中川・中尾 2017, Nakagawa et al. 2017)。これらの内容はすべてを総合した上で、2017年に開催された国際シンポジウムにおいて口頭発表も行なった。

また、ここまでの研究内容は日本先史時代における戦争の起源に関するものであるが、その原因について考察した研究も発表した(中川・中尾・田村・山口・松本・松木 2019)。これは甕棺と呼ばれる土器製の墓の数から人口動態を推定し、その人口動態と暴力頻度の間の関係を考察した研究である。この研究の中で、甕棺に関して実測図のあり方や実際の遺物を現地で観察することなどを通じ、先述した日本考古学の理論的基盤に関する哲学的検討へのフィードバックを得ることができた。この研究についてもさまざまな場所で口頭発表を行なっているが、特に岡山大学で開催された国際シンポジウムにおいて、ある種の学際研究としてその成果を発表することができた。

以上のように、考古学そのものに関する歴史的・哲学的考察は、かなりの部分を達成することができたが、それを足がかりとする人文学の哲学の基盤構築に関しては、その端緒を達成するにとどまっている。したがって、この最後の課題を今後も継続して発展させていきたいと考えている。

引用文献

- 阿子島香・溝口孝司(監修)2018.『ムカシのミライ:プロセス考古学とポストプロセス考古学の対話』,勁草書房.
- Ikawa-Smith, F. 1982. Co-traditions in Japanese archaeology. *World Archaeology*, 13(3): 296-309.
- 中尾央. 投稿中. 日本考古学の理論的基礎.
- 中尾央. 2019. Practice without theory is blind (and theory without practice is empty). 日本旧石器学会シンポジウム予稿集第17回: 71-74.
- 中川朋美・中尾央・田村光平・山口雄治・松本直子・松木武彦. 2019. 弥生時代中期における戦争: 人骨と人口動態の関係から.『情報考古学』24(1-2): 10-29.
- 中尾央. 暴力・文明・哲学: 学際的アプローチ. 岡山大学社会文化科学研究科文明動態学研究センターキックオフ・シンポジウム(Kick-off Symposium for the Center for Research on the Dynamics of Civilizations to go Beyond ARCHAEOlogy), 2018/02/21.
- 中尾央. 2018. 考古学理論との対峙: プロセス考古学とポストプロセス考古学. 阿子島香・溝口孝司(監修)『ムカシのミライ: プロセス考古学とポストプロセス考古学の対話』, pp. 1-20, 勁草書房.
- Nakao, H. 2018. A quantitative history of Japanese archaeology and natural science. *Japanese Journal of Archaeology*, 6(1): 3-22.
- Nakao, H. & Nakagawa, T. Violence and warfare in Japanese prehistory. Perspectives on prehistoric cultural evolution: From archaeology to behavioral experiment, AP品川. 2017/08/07.
- 中川朋美・中尾央. 2017. 人骨から見た暴力と戦争: 海外での議論を中心に.『日本考古学』44: 65-77
- 中尾央・松木武彦. 2017. はじめに.『文化進化の考古学』勁草書房, i-viii.
- 中尾央・松木武彦・三中信宏(編). 2017.『文化進化の考古学』勁草書房.
- Nakagawa, T., Nakao, H., Tamura, K., Arimatsu, Y., Matsumoto, N., and Matsugi, T. 2017. Violence and warfare in the prehistoric Japan. *Letters on Evolutionary and Behavioral Science*, 8(1), 8-11.
- 中尾央. 考古学的実践の哲学: 日本考古学を例に. @早稲田大学先端社会科学研究所セミナー. 2017/01/20.

Nakao, H., Tamura, K., Arimatsu, Y., Nakagawa, T., Matsumoto, N., and Matsugi, T. 2016. Violence in the prehistoric period of Japan: the spatiotemporal pattern of skeletal evidence for violence in the Jomon period. *Biology Letters*, 12: 20160028

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Hisashi Nakao	4. 巻 6(1)
2. 論文標題 A quantitative history of Japanese archaeology and natural science	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Japanese Journal of Archaeology	6. 最初と最後の頁 3-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Nakagawa, T., Nakao, H., Tamura, K., Arimatsu, Y., Matsumoto, N., and Matsugi, T.	4. 巻 8
2. 論文標題 Violence and warfare in the prehistoric Japan	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Letters on Evolutionary and Behavioral Science	6. 最初と最後の頁 8-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5178/lebs.2017.55	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中尾央	4. 巻 5月号
2. 論文標題 人間進化と二つの教育：人間進化の過程において教育はどのような役割を果たしたか	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 188-197
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中尾央	4. 巻 18
2. 論文標題 ナチュラル・ペダゴジー理論の行方	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ベビーサイエンス	6. 最初と最後の頁 50-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中川朋美・中尾央・田村光平・山口雄治・松本直子・松木武彦	4. 巻 24(1/2)
2. 論文標題 弥生時代中期における戦争：人骨と人口動態の関係から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 情報考古学	6. 最初と最後の頁 10-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中尾央	4. 巻 17
2. 論文標題 Practice without theory is blind (and theory without practice is empty).	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本旧石器学会シンポジウム予稿集	6. 最初と最後の頁 71-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件（うち招待講演 8件 / うち国際学会 8件）

1. 発表者名 中尾央・中川朋美
2. 発表標題 初期国家と戦争：弥生時代と古墳時代を例に
3. 学会等名 HBES-J 2018
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hisashi Nakao
2. 発表標題 An introduction to cultural evolutionary studies
3. 学会等名 第14回日独先端科学 (JGFoS) シンポジウム (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中尾央・中川朋美
2. 発表標題 日本先史時代における古人骨データと戦争の進化
3. 学会等名 日本進化学会第20回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中尾央
2. 発表標題 進化発生物学の歴史と哲学
3. 学会等名 日本進化学会第20回大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hisashi Nakao et al.
2. 発表標題 Prehistoric violence in Japan
3. 学会等名 SEAA conference 2018（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hisashi Nakao & Tomomi Nakagawa
2. 発表標題 Violence and warfare in Japanese prehistory
3. 学会等名 Perspectives on prehistoric cultural evolution: From archaeology to behavioral experiment（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中尾央・中川朋美
2. 発表標題 日本先史時代における戦争の進化：人口動態との関係
3. 学会等名 日本進化学会第19回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中尾央・中川朋美
2. 発表標題 先史時代の争い
3. 学会等名 第一回犬山認知行動研究会議（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nakao, H., Tamura, K., Arimatsu, Y., Nakagawa, T., Matsumoto, N., and Matsugi, T.
2. 発表標題 Violence in the prehistoric period of Japan: the spatiotemporal pattern of skeletal evidence for conflict in the Jomon and Yayoi period
3. 学会等名 HBES-J 2016
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Nakao, H., Tamura, K., Arimatsu, Y., Nakagawa, T., Matsumoto, N., and Matsugi, T.
2. 発表標題 Conflict in the prehistoric period of Japan: the spatiotemporal pattern of skeletal evidence for conflict in the Jomon and Yayoi period
3. 学会等名 HBES 2016（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 中尾央
2. 発表標題 考古学的実践の哲学：日本考古学を例に
3. 学会等名 早稲田大学先端社会科学研究所セミナー（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中尾央
2. 発表標題 過去という実験
3. 学会等名 サイエンスアゴラ2019 キーノートセッション（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nakao, H.
2. 発表標題 Warfare in the Neolithic: Comments on Project “Neolithic Civilizations of Eurasia: Jomon - Origin, Early Stages, Local Peculiarities”
3. 学会等名 International Workshop “Early Civilizations from the Viewpoints of the Northeast Eurasian Prehistory: A New Perspective”. （招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tamura, K., Nakao, H., Takata, K., Hashimoto, T. and Matsugi, T,
2. 発表標題 Quantifying morphological variation of bronze and iron arrowheads of the Kofun period in Japan
3. 学会等名 MORPH 2019（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tamura, K., Nakao, H., Yamaguchi, Y., and Matsumoto, N.
2. 発表標題 Elliptic Fourier analysis of the Ongagawa pottery in prehistoric Japan
3. 学会等名 MORPH 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中尾央・中川朋美・田村光平・山口雄治
2. 発表標題 弥生時代中期北部九州における戦争
3. 学会等名 進化学会第21回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中尾央
2. 発表標題 Practice without theory is blind (and theory without practice is empty)
3. 学会等名 日本旧石器学会第17回大会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中尾央
2. 発表標題 暴力・文明・哲学：学際的アプローチ。
3. 学会等名 岡山大学社会文化科学研究科文明動態学研究センターキックオフ・シンポジウム (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 阿子島 香、溝口 孝司	4. 発行年 2018年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 256
3. 書名 ムカシのミライ	

1. 著者名 中尾央・松木武彦・三中信宏	4. 発行年 2017年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 240
3. 書名 文化進化の考古学	

1. 著者名 慶應義塾大学教養研究センター、赤江 雄一、高橋 宣也	4. 発行年 2019年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 308
3. 書名 感染る	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考